
勇魔の誓約

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇魔の誓約

【Nコード】

N4903G

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

魔王との最終決戦。不敵に微笑む魔王、宿敵を倒さんと意を決した勇者。しかし、勇者は突如血を噴き出し、前のめりに倒れてしまふ……これは、魔王と、勇者の娘である少女の物語。

（前書き）

恋愛じゃないです。

「ち、父上えええ！」

火山地帯、辺りを見渡せばマグマが見えるこの場で、少女の叫びが響いた。

岩地でうつ伏せになったままピクリとも動かない男。勇者と呼ばれていた者。

その男を父と呼んで駆け出し、寄り添い喚叫する少女。一緒に旅をしていた勇者の娘。

そして、男と少女を茫然自失の様で見据えて立ち尽くす一人の男。宿敵、魔王。

「父上、父上えええ」

綺麗な顔を泣き顔に歪め、少女はうつ伏せに倒れたままの父を、勇者を揺さぶる。この光景は端から見れば、勇者が魔王に敗れてしまったと思うわれるだろう。

だが、口から鮮血を垂らしてはいるも、勇者には傷が一つとしてない。なのに死んでいる。勇者は呼吸はおろか、心臓すらもう動いていない。

勇者は、戦う前に死んでしまったのだ。魔王を目前にしておきながら、不治の病により……命の炎は燃え尽きてしまった。

勇者は、本来ならば戦える体ではなかった。

魔法でも、聖力を持ってしても治せない病に侵されていたから。にもかかわらず、周りにも、実の娘にすらそのことを伏せつつ戦い抜いてきた。体に無理をきかせて、魔王の兵隊を全て倒し、こうし

て魔王との最終決戦を迎えようとしていた——はずだったのに……
剣を構えた時、口から血を嘔き出し、そのまま朽ちて逝った。

「う……うう……父上え……どうしてえ」

「勇者よ……」

勇者の背中に伏せてすすり泣いていた少女に、魔王はゆっくりと歩み寄る。

近づいて来る足音に少女は顔を上げて睨んだ。

次は自分が死ぬと思っていた。自分では魔王には勝てない、殺される。けど死への恐怖より、悔しさによる怒りが打ち勝っていたから、少女は睨む。これから自分を殺す、父の宿敵を——そのつもりだったのに、眼に写った魔王の態度は、あまりに予想に反したものであった。

「何で、何で……」

少女が予想していたのは、悪意に満ち足りた笑顔で嘲る魔王の姿。しかし、自分達を見下ろしている魔王は、精悍な顔付きは黙したまま、大粒の涙を頬に流していた。

「何でお前が泣いている！」

怒りの形相で、少女は問い掛けるも、魔王はただ金色に輝く獣の瞳に少女を捉えたまま、沈黙していた。

「答える！ 何故だ！」

「悲しいから……」

長い沈黙を破り、魔王は振り絞るように呟いた。

「何が悲しい。お前を倒す敵は、勇者は、もういなくなった……死んだんだ。お前の勝ちなのに。その何が悲しいんだ！」

少女の悲痛な叫びに、魔王は瞳を伏せて首を横に振った。

「勝ち負けに興味は無い……俺は……強い者と……勇者と戦って、敗れて死にたかったんだ」

「え……」

「……それが望みだったんだ」

「嘘だ…… お前は世界を滅ぼそうと魔物を送り出して、街や村を襲わせていたはずだろ。野望は世界を征服することと配下の魔物が――」

「“配下の魔物”がだろう……俺は魔王になったつもりはない。勝手に魔王と祭り上げられただけだ……」

魔王と呼ばれるまで、その悪魔はただの戦士だった。

前魔王の兵隊として、戦って、戦い続け、戦い抜いていた。それこそが至高の喜び、唯一生きていると実感できるものだったから。

特に強者との出会いは、闘争心の炎をたぎらせてくれた。生を感じさせてくれた。

そうしていくうちに、あまりの強さに地位を脅かすとされ、前魔王に戦いを挑まれた。願ってもない強者、悪魔は歓喜に奮え受けて立った。

「そして、俺は戦いの末に前魔王に打ち勝ち、気が付いた時には周リから魔王と呼ばれていた」

その後は何もない。ただ、魔王としているだけで、何もない。

「魔王としてのことなど、俺は何一つしていない。もともとは、今は勇者が倒して亡き者となった側近の悪魔が、魔物共を動かしていたんだ。俺を魔王と言う象徴に仕立て上げ、動力源として利用してな」

それにすら興味はなかった。勝手にしろと言わんばかりに、魔王は咎めもせず、側近達に言いようにさせていた。例えばとばかりが来ようと、それで構わない。

自分は地位が魔王でも、戦士でいたいから。

戦いたい、自分以上の敵が欲しい。そう願っていた。

「それじゃあ、父上は既に混沌の元凶を打ち倒して……」

「そういうことになる……だが、魔王の俺が死なんことには、魔物共もおとなしくはならんだろうがな……」

虚しさを漂わせて魔王は呟く。そして少女に背を向けて、手を天に翳した。すると、巨大な黒い刀身の剣が空から落ちて来ると、魔王の足元に突き刺さった。

剣を引き抜くのを見た少女はさつと立ち上がり、腰の鞘から剣を抜いて構えた。

「案ずるな……俺はこれから、死ぬんだ」

「え……」

「お前の父上である勇者は死に、強い者はもういない……俺が生きる意味は、理由は、もう無い」

魔王は一旦溜息で区切り。黒ずんだ雲を眺めて口を開いた。

「戦士は……戦って死ぬべきだ。戦いに生き、戦いに死ぬ。俺は……魔王としてではなく戦士として強い者と戦い、そして死にたかった」

勇者なら、魔王の軍勢を打ち破った勇者ならばその願いを叶えてくれると、大きく期待していた。慌てて配下の魔物が報告に来るごとに、魔王の期待は膨らんでいた。

早く来い、俺は此処にいる。もっと敵を倒して強くなり、もっと戦いを、相手の死を経験して、心身共に最強の戦士となり、俺の前に立て——そう願いつづけていた。

「結局、俺の待ち望んでいた瞬間は訪れなかったがな」

手に握る剣を天に向け、魔王はほくそ笑んだ。この皮肉な結末に、後悔の念を抱いて。

「俺が死ねば、世界中の魔物共もおとなしくなるだろう、世界は平和に戻るだろうさ」

そして、刃を首に当てた。

「お前……本当に」

「俺が死んだら、お前が倒したことにして、この首を周りに突きつけてやれ……」

このまま引いてしまえば、首を落とせる、死ねる。

瞳を閉じ、魔王は覚悟を決めたその瞬間――

「ふざけるな！」

少女が魔王に怒鳴り声を浴びせた。思わず引こうとした刃が止まる。

「許さないぞ。言いたいこと言うだけ言って、それで勝手に自分で死ぬだなんて！」

剣を首もとから下げて、魔王は少女に振り返った。

「お前は、お前は戦って死ななきゃダメだ！　じゃないと、お前を倒すために頑張ってきた父上が報われない！」

歯を剥き出しにして、今にも食って掛かりそうな勢いで、少女はなる。

「……俺にどうしろという。生きていても仕方のない俺にどうしろと」

俯いたまま、魔王が問い掛ける。少女はしばらく黙っていたが、意を決したように気を引き締め、重く閉じていた口を開いた。

「十年待て……十年後に、お前の望みを、父上の望みを、叶えてやる」

「十年後？」

「何千という時を生きている悪魔には、そんな長くはないだろ」

「確かにそうだが……」

意図が読めない。少女は何を考えてそんなことを口にするのか。魔王の疑問など余所に、少女は父を、勇者の亡骸を背負い、魔王に背を向けて歩き出した。

「いいか、十年後にまたこの場所に来い。必ず望みを叶えてやる」

約束だ――

振り向かずして、その一言だけを言い残し、少女はこの場を去っていった。

その日から、魔王は姿を消した。

世間では、勇者は魔王と相討ちとなり、その娘が勇者の亡骸を持ち帰り供養したとされている。

魔王が行方不明になったことから、統率力などを失った魔物はおとなしくなり、世界は平和となった。

娘はその後、故郷の村に帰り、しばらくして旅に出た。

村人達との別れ際にこう呟いて――

約束したんだ。あいつと、父上に……

その後、少女を見た者はいない。一部では、勇者の娘はドラゴンと戦って喰われたなど、嵐に巻き込まれて死んだなどと、噂が流れていたが、次第に人々の記憶から薄れていった。

そして、少女が魔王と約束してから十年が経ったその日。

「懐かしいな……」

魔王は、約束の場所にいた。約束の場所は、昔とは変わり、今となつては煮えたぎっていたマグマも、黒ずんだ雲も無く。蒼天が大地を照らす世界は、まるで闇が晴れたような清々しさを誇っていた。「本当に……俺の願いは叶うのだろうか」

懸念に色を染めて、魔王は呟いた。

魔王はこの十年間、不安と期待が渦巻いていた。自分の願いを叶えてくれるかもしれない。けど、もしかしたら少女は約束を果たせず、自分は無駄な時を過ごしてしまったのかもしれない。その答えが、今日ではつきりとする。

そんな期待と不安の高ぶりが魔王を緊張へと誘う。そわそわする気持ちを表には出さず。魔王はその場に立ち尽くして、待っていた。瞳を閉じれば、約束をした日を思い出す。

魔王に背を向け、「約束だ」と呟いた横顔が。

あの時見せた。少女の憎しみも悲しみもなく、まっすぐに澄んだ蒼い瞳を。

きつと約束を守り、ここに現れる。そんな気にさせるものだった。

だが……夕日が沈もうとする時間になっても、少女が来る気配は一向にない。

「やはり……」

やはり約束は果たせずか……

そう、魔王が溜め息混じりで落胆しかねていたその時——足音が後ろから聴こえて来た。途切れ途切れに砂利を潰す、蹴る、そして地を擦る音は、明らかに歩く歩調そのものだった。

魔王はハッと俯けていた顔を上げ、後ろを振り返った。

すると――

「待たせたな……」

少女は、いや、もはや少女ではなく、彼女はそこにいた。昔のような幼さは消え、凛々しくも勇敢そうな顔付きを始め、引き締まった腕や腰など肌が見えるところには、所々に古傷が残っている。

身に纏う雰囲気も、威圧的なものだ。

一目見て判る。目の前にいる少女だった女は、百戦錬磨の羅刹女へと成長しているのが。

「来たか」

「ああ……お前と、父上の望みを叶えに来た」

魔王は歡喜に奮えた。目の前にいるのは、まさに自分が求めた者。待ち望んでいた瞬間だ。

「苦労したよ。お前に追いつくために、父上を超えるために、私は女を……人であることを辞めなくてはいけなかったんだから……」

「人を辞めた……まさか、悪魔に？」

「違う……」

突如彼女の体が眩い光を放つ。魔王は腕で顔を覆いつつも、目を細めて彼女を見やる。

「これが……私が手に入れた力だ」

彼女が右手を前にかざすと、蒼い光が集まり、結晶のようなものが現れる。それが重なり、繋がり、次第に剣へと変化していった。

「これは……この力は……聖力」

「そうだ。天使が持つ魔力とは対なす力を、私は極めた」

結晶の大剣が完成し、グリップを右手に納め握り締めると、彼女は自分の身の丈はあろう大剣を頭上で一回転させてから、地面へと突き刺す。

「何故、人間のお前がその力を？」

「最強の天使を探し出し、倒して力を奪うことで、私はこの力を得た」

「最強の天使……なるほど、遠い昔滅ぼされた天使の最後の生き残り」と戦ったというわけか」

「長い道のりだったよ。何度も死にかけたんだから……挙げ句の果てには、聖力のせいで歳をとらなくなってしまった」

「ふふ……俺と似て非なるか」

穏やかな笑みを浮かべ、魔王も妖しく赤黒い光を放ち、手を上にかざすなり魔法陣を作り上げ、頭上から紅い大剣を召喚した。まるで、血の塊のようなギザギザの紅い刃を持つ剣を、魔王は両手に持ち、正面に構えた。

「そうだな。お前が魔王なら、さしずめ私は聖女となるのかな？」

「いや、戦乙女にすらほど遠いな……そんなナリでは」

「ふっ……かもな」

皮肉を言われても、彼女は大笑して気にもせず、他人事のように微笑んだ。彼女につられて、魔王も親しげな笑顔に向けた。

「そろそろ……始めるか？」

「ああ……」

彼女の一言により、なごやかな雰囲気も一転し、周りが殺気に包まれていく。魔王も肌で感じとり、笑みを浮かべはしつつも、交戦の態勢へと切り替える。

空気はもはや、一触即発の域に達していた。

「そついえば……お前の名前を聞いていなかったな」

不意に、魔王は言った。

「勇者の娘よ。お前の名を聞かせてくれ」

魔王に訊ねられた彼女は、不敵に口元を吊り上げた。

「そうだな。魔王アルデイスの最期となる相手なのに名乗らないわけにはいかないな……」

いいか、一度しか言わないから、よく覚えておけ――

私の……私の名は――

終

（後書き）

ちよつと出来の悪い内容になってしまいましたね。神話的なイメージで書いてみたんですが、失敗かもです。それでは、感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4903g/>

勇魔の誓約

2010年10月8日14時56分発行